

取組の背景・目的

多くの方が他者との接触をさげ、施設も感染拡大防止のために利用者の受け入れ制限を設けていたコロナ禍の影響で、令和元年度以降の児童センター利用者は大きく減少した。特に中高生は令和3～4年度に利用中止期間や午後5時以降の1時間しか利用できない期間があり、コロナ禍前(平成30年度)の年間20,827人の利用が、令和3年度には588人まで激減した。

令和5年5月に新型コロナウイルス感染症は「5類感染症」に移行し、館の運営への制限が大きく緩和された。この機会に館の喫緊の課題として、利用者の回復と利用促進、利用者の居場所としての再定着を挙げ、特に中高生の利用促進には注力していくこととした。

またコロナ禍の制限緩和とほぼ同時期の令和5年4月には「こども家庭庁」が発足、関連法案の「こども基本法」も施行され、その趣旨を館運営に反映させていくことを目指した。

<目的>

- 子ども自身が、いつでも気兼ねなく、自由に思いや意見、要望を発信できるようにし、第3の居場所として定着させる。
- 様々な活動をする子ども達をつなげ組織化し、館運営に子どもたちの意見を反映し、居心地の良い場所とする。

取組の概要

<実施場所>

- 主に滝王子児童センター館内
- 近隣地域(おまつりなどの地域イベント)

<実施内容>

- ホワイトボードを「ご意見ボード」「ほしいものボード」として活用し、子ども達から意見を募った。
- 夏休みにやりたいことを考える、小学生の企画会議の場「夏休みまんきつし隊」を実施。
- 中高生の意見を集約する「ティーンズミーティング」を月一回定例化し、定着させた。
- ティーンズミーティングの要望を元に「ブレイクダンスワークショップ」を月2回実施、例月事業として定着させた。



<実施頻度>

- ホワイトボード、6月以降常設
- 夏休みまんきつし隊、7月4回ミーティング実施
- 8月「手作りVRお化け屋敷」実施
- 中高生対象のティーンズミーティングを7月より月1回実施
- ブレイクダンスワークショップ 9月より月2回実施



← ↓ティーンズミーティング



<実施内容>

- 小学生夏休み工作4選「スライム」「ミサンガ」「カリンバ」「レインボースティック」
- 夏休み 手作りVRお化け屋敷
- ブレイクダンスワークショップ



工夫点・留意点

- ① ホワイトボードを常設し、時期ごとに「ほしいもの」「やってみたいこと」などのテーマを決めて、子ども達や保護者が自由に意見を書き込めるようにした。
例) 読みたい本、館にあったらいい遊具、夏休みにやりたいこと、ワークショップのテーマ
- ② ①で出た子ども達の「夏休みに週 1 回工作したい」「お化け屋敷をしたい」という意見を踏まえ、意見を出した子ども達に実現までの計画を立ててもらった。計画から運営までのフローチャートを作成したことで、スムーズに進めることができた。
- ③ お化け屋敷は限られたスペースと少ない子どもスタッフで準備・運営できるように工夫し、子ども達のアイデアで目隠しをして台車に乗り、即席 VR お化け屋敷として実施した。
- ④ 中高生を対象に月 1 回ティーンズミーティングを実施し、彼らが関心を持っていることや学校、友達の話、やりたいことなどを話していくうちに信頼が深まり、数回クッキングなども実施した。
- ⑤ ④の結果、参加した高校生はみなダンスの関心が高いことがわかった。彼らは今まで自己流でダンスをしており、専門的な指導者から教わりたいという意見が出た。職員が他館のダンス指導者と高校生を結び合わせ、「ブレイクダンスワークショップ」が実現した。



ブレイクダンスワークショップ

取組の効果

- ・ホワイトボードに書かれた意見を参考に遊具やマンガ類などを購入し、子ども達の好評を得た。
- ・子ども達の意見が館運営に反映されることで児童センターへの期待が高まり、複数の子どもから企画のアイデアが提案されるようになった。冬休みには新たな児童が主体となってお楽しみ会を企画運営し、ゲーム大会と暗闇ドッチボールを実施。延べ 63 名が参加した。
- ・児童センターは自分たちの意見が実現できる場所としての認識が少しずつ広がり、居場所として活用してくれる子ども達が増えてきた。
- ・中高生の「ブレイクダンスワークショップ」を見ていた小学生がダンスに関心を持つようになったため、一部ワークショップに参加してもらい、小学生と中高生の異世代交流の場となった。
- ・中高生ミーティングの中から「ブレイクダンスワークショップ」の成果を発表する場が欲しいという意見が出て、3 月に高校生企画のステージイベントを実施することになった。計画から運営までを中高生が中心に行い、小学生との交流の成果も披露する予定である。

課題・今後の展開

- ・「夏休みまんきつし隊」の取り組みを定例化したかったが、児童の習い事などの都合で実現できなかった。その後も自主企画イベントに関わる児童は一定数出てきているが、忙しい彼ら、彼女たちの都合を調整し、結び合わせていくことは現状一番の課題である。
- ・少しずつでも中高生の「ティーンズミーティング」と小学生の中心メンバーを結び合わせ、異世代の先輩後輩の交流をしながら、継続的に自主活動を展開でき、児童センターが世代を超えた居場所になるよう支援していきたい。
- ・小中高生スタッフの組織化を図り、子ども達が自由に意見を発信しそれを実現できる環境を整え、子ども主体の館運営の実現と職員が変わっても継続される体制作りを目指して、子ども達の居場所として、さらなる充実を図っていきたい。